

雪だるまで版画!?

アートの現場から

A C A C 通信

今年には新年から雪、雪、雪。雪かきに始まり雪かきに終わる毎日です。去年は全くと言ってよいほど積雪が無かったので、2年分一度に降っているのかしらと思っほほほです。

青森公立大学国際芸術センター青森では2月20、21日(土、日)という一番雪深い時期の2日間に、そんな雪にうんざりしている気分を、前向きに変えるようなワークショップを開催します。「自分の顔de雪だるまを作ろう」というタイトルの、シルクスクリーンという版画の技法を使って雪だるまを作るといふ、聞いただけではどうやって作るのか想像がつかないようなワークショップです。

シルクスクリーンは、言葉にはあまり馴染みはないかもしれませんが、実はTシャツやトートバッグなどの印刷に使われることもある技術です。また、30代以上の方ですと、「プリントゴッコ」という商品をご存知の方もいるかもしれません。プリントゴッコは、シルクスクリーンの道具や

工程を簡易化した、家庭用の印刷機です。今どこ誰でもパソコンで図柄を作ってプリンターで印刷する、というのが当たり前ですが、私が子供の頃は家庭にパソコンは無く、年賀状作

成と言えばプリントゴッコを使う人も多くいました。

ワークショップでは、顔を写真に撮り、その写真をシルクスクリーンで刷ります。直接雪だるまに刷るのは難しいので、オブラートに印刷し、それを雪だるまに転写して自分の顔の雪だるまにします。オブラートは直径9センチの小さなものなので、目、鼻、口のパーツごとに分けて刷るので、雪だるまに転写する時にちょっと位置を変えると、表情の違う雪だるまも作ることが出来ます。

講師にお招き

する小野耕石さんは、シルクスクリーンで何度

も同じ所に刷ることで、インクを重ねて分厚く

小野耕石さんがシルクスクリーンで作った雪だるま

して、立体にした作品が知られています。キャンパスの上にシェルフのようにインクの粒が並ぶ作品もあれば、そのインクの粒をセミの抜け殻など他の立体に張り付けた作品もあります。一般的には平面のものと思われている版画と立体を行き来し、2次元と3次元の境目はどこにあるのか探るような作品です。今回のワークショップも、平面から立体になる時の変化も楽しみの一つになるでしょう。

ある版画家の方は「シルクスクリーンは、空気以外は何にでも刷れる」と教わったそうです。今回は直接雪に刷るわけではありませんが、版画と雪という、今まで見たことの無い組み合わせです。移動も大変な季節ですが、ご参加お待ちしております。

「自分の顔de雪だるまを作ろう」は2月20、21日(土、日)の午前10時から午後4時まで。参加無料、定員15名、申し込み制。防寒具を持参してください。

(青森公立大学国際芸術センター青森主任学芸員 金子由紀子)

※第1金曜日掲載

